

所属・資格 史学科・助手

申請者氏名 山本 興一郎

研究課題		古代ローマ政治における表象と相互利用
報告の概要	研究目的 および 研究概要	本研究の目的は、古代ローマ政治変動期と表象の関わりについて、表象利用が当該期において如何なる影響を与えたのか、また表象を如何に改変させえたのか、その関係性について検討するとともに、どのように帝政期に引き継がれたのかについて、その諸様相を、継続的・発展的に検討し明らかにすることを旨とするものである。対象時期は、表象利用を検討する際に重要な史資料である古銭史料や碑文史料の種類等が激増する共和政最末期を主な対象とするが、下記理由により、貨幣上に表象が頻出し始める共和政後期も検討範囲として設定した。
	研究の 結果	<p>上述の研究目的と時期設定に従い、古代ローマ史先行研究で Sex.ポンペイウスを軸とする研究とオクタウィアヌス・帝政成立史を軸とする研究では扱いに温度差があり、ローマ皇帝像形成の際、重要な名乗りの一つとなったにも関わらず大きな注目を集めてこなかった、オクタウィアヌスによる名としての imperator 使用と表象利用の関係に注目し、検討した。</p> <p>オクタウィアヌスは生前の父カエサル由来の権利を根拠としつつ実績を積んだ上で、カエサルを継ぐ軍事的指導者像を体現する名として、遅くとも前38年迄に praenomen (個人名) の位置で imperator を使用し始めた。その時期とは暗殺者勢力打破後のカエサル派内や競争者間の複雑な提携・妥協・対立期にあたる。即ち「暗殺への復讐」や「共和政の擁護」という大義が失われた後だからこそ、オクタウィアヌスら各有力者は自身を効果的に示すために、表象利用を、相互に作用しながら、より一層展開させたのである。更に三頭政治家大ポンペイウスを継いだ息子 Sex.ポンペイウスとカエサルの「息子」オクタウィアヌスによる表象利用は、官職や権限による正当性主張と共に、自身の勢力・求心力維持や敵対者対策のために「父」由来のものを継承或は発展的に利用する点、意匠を過去から或いは相互に取り入れ改変する点等、密接に影響する関係であった。即ち両者には、従来言われてきた貨幣意匠の模倣、名の影響だけではなく、それらを包括し得る共通の表象利用傾向があった点を明らかにした。</p>
	研究の 考察・ 反省	本研究では、帝政期に継承された名としての imperator 使用の端緒に注目し、更に Sex.ポンペイウスとオクタウィアヌス、M.アントニウスら有力者による当該期表象利用を検討の軸として明確化し検討することで、時の政治動向と文献史料・古銭・碑文に表された表象の相互作用の一端を明らかにすることが出来た。このように相互に影響を与えながら展開した表象利用が内乱終結後、帝政初期に如何なる形で継承されていくのかについては、今後の研究課題である。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究成果物 テーマ:「第二回三頭政治中期における表象と相互作用一偉大な父の息子達の確執と模倣一」 誌名:『史叢』 巻・号:第99号, pp.52-69. 発行年月日:2018年9月30日 発行所・者:日本大学史学会	